

平成二十六年 第一回入学試験問題

国語 (五〇分、一〇〇点)

受験についての注意

- 一、試験開始のベルが鳴るまで、問題用紙を開かないでください。
- 二、問題は ～ まであります。
- 三、各問題とも、解答は解答用紙(別紙)の所定の欄に記入してください。
- 四、解答用紙には受験番号、名前を必ず記入し、最後にもう一度確認してください。
- 五、解答用紙だけ回収しますから、問題用紙は持ち帰ってください。
- 六、指示がない限り、句読点や記号などは一字として数えます。
- 七、正しく読めるように、読みがなをふったところがあります。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公勇氣は都会で高校を出て、都会とは全く違った田舎の神去村で林業の仕事についている。勇氣は同僚のヨキ、その妻みきさんと共に、ヨキの祖母である繁ばあちゃんの家に住んでいる。三太は、勇氣の働く中村林業株式会社の社長である清一と、その妻祐子の子どもである。

日曜の夕方に、三太が俺を訪ねてきたんだ。いつもどおり鍵のかかっているヨキんちの玄関から、

「こんにちは」

と三太の声がした。俺が茶の間から顔を出し、

「おう、三太。上がれよ」

と言うと、三太は敷居を越え、土間に入ってきた。でも、茶の間には上がらず、土間でもじもじしている。

「どうしたんだ。そんなところじゃ寒いだろ。コタツにあたれば」

「うん、ええんや」

なんだか様子がおかしい。ヨキとみきさんと繁ばあちゃんも、茶の間でテレビを見ていたんだけど、^①いまや全員の視線が三太に集中している。三太はますますうつむいてしまったが、^②やがて上目づかいに俺を見た。

「あいな、ゆうちゃん」

「うん」

「クリスマスで、知ってる？」

「そりゃ……」

俺は絶句してしまった。そうか、三太は今まで知らなかったのか。(③) したけど、(④) もした。なにしろ神去地区は、神

去村でも一番奥にあって、学校に通うような子どもは三太だけだ。まわりはジジババばかりだし、清一さんは村の風習を重んじなければならぬ。「おやかたさん」だして、洋風のイベントなんてしない。三太は小学生になって、同級生の友達もできて、ようやくクリスマスというものが存在することに気づいたんだろう。

ここは考えどころだぞ、と思った。「知ってる」と俺が言ったら、三太は「自分だけが知らなかった」と傷ついてしまうんじゃないだろうか。それに、清一さんはなにか考えがあつて（誕生日でもないのに子どもにプレゼントをあげるなどという、異国の風習は無視するべきだ、とか？）、三太からクリスマスの情報を遠ざけていたのかもしれない。

ところがヨキが、

「おったまげたな、こりゃ。三太、クリスマスも知らんのかいな」

と、大きな声で言ったんだ。ひとの気づかぬことを無にすることにかけて、ヨキの右に出るものはいない。ヨキの無神経な発言で、三太は泣きだしそうになっている。

⑤「いちおう知ってるけど」

と、俺はあわてて言った。「クリスマスなんて、べつにたいしたもんじゃないよ」

ううう、我が身を刺す言葉だぜ。直紀さんにお誘いをかけられないから、「たいしたもんじゃない」クリスマスになりそうなだけだつていうのに。

三太がベソをかきそうなのを見て、ヨキも動揺したらしい。⑥

⑦「そうなの？」

と、俺の発言に乗った。「三太と同じ名前の子の前のおいちゃんが、夜中に家んなかに入ってくるだけで」

サンタクロースは泥棒でも妖怪でもないよ。なにを勝手なこと言ってるんだ。

見かねたみきさんが、会話に参加してきた。

「三太、みかん食べ」

「うん、ありがとう」

みきさんから手渡されたみかんを、三太は茶の間の端っこに腰かけて食べた。やっぱり靴は脱がないまま、足は土間のほうへ下ろしてぶらぶらさせている。

⑧「それで？」

三太が少し心を落ち着けたのを見計らい、みきさんは尋ねた。「三太はクリスマスを、どういうもんやと思ってるんや？」

「ダイちゃんやミヒロくん（小学校の友だちだろう）が言うにはな、クリスマスには大きな木に飾りつけをするんやて。七夕みたいなもん？」

「うーん、ちょっとちがう」

と俺は言った。「クリスマスの飾りは、星とかミラーボールみたいなやつだと思っよ」

⑨「ちこそうさんでした」

三太は食べ終わったみかんの皮をきれいに畳み、俺に手渡した（律儀だ）。そのうち、「そうなんか」と首をかしげる。

「それとな、鶏の唐揚げ食べて眠ると、サンタはんが靴下のなかにええもん入れてくれるんやて。俺、靴下履かんと寝るんやけど、そのせいで、サンタはんはいままで来てくれなかったんやろか」

⑩「どうだろうなあ。俺は答えに困ってしまった。三太が語るクリスマスは、俺の知ってるクリスマスと微妙にちがって、あやしげなまじないの話みたいに見える。」

「とにかく、クリスマスって楽しいものなんやて。俺もクリスマスしたいー」

三太の意気込みをまえに、茶の間にいた大人たちは顔を見合わせた。ヨキが、「おまえに任せる」という視線を送ってきたので、しかたなく俺が代表して質問した。

「クリスマスについて、清一さんに聞いてみた？」

「うん」

「清一さんは、なんて言ってた？」

「考えとく、つて。お父さん、なにを考えるんやろか」

⑧「サンタクロースが入ってこれるように、玄関の鍵を開けておくべきかなあ、つてことじゃないか」

「鍵なんか、いつもかけとらん」

「じゃあ、唐揚げ用の鶏肉をどんぐらい買えばいいかなあ、つてことだよ」

「そうやろかなあ」

^E 三太は納得がいけないみたいだった。恋人ならぬお父さんがサンタクロースだと、ばれてはいけな
「ほら、もう暗くなってきたから、帰りな。送ってく」

と、俺は話をそらした。三太と一緒に、清一さんの家まで歩く。なぜかヨキもついてきた。

(三浦しをん「神去なあなあ夜話」)

※1 茶の間……住居の中で、家族が食事やだんらんなどをする部屋。

2 敷居……部屋の仕切りにおく、溝などのついた横木。

3 土間……建物の中で床を張らずに地面が露出しているもの。

4 絶句……話や演説の途中で言葉に詰まること。

5 おやかた……【親方】職人・弟子・奉公人などを指導・保護する立場にある人。

6 直紀さん……清一の妻祐子の妹。勇気が好きな人。

問一 — 線①「いまや全員の視線が三太に集中している」のはなぜですか。具体的に説明している文中の語を使って、四十字以内で答えなさい。

問二 — 線②「上目づかいに俺を見た」の理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア うつむいた後で顔を上げるのがはずかしかったから。

イ みんながどのような反応をするか不安だったから。

ウ みんなの注目をあびているのがいやだったから。

エ 勇気が怒っているのではないかと思ったから。

問三 (③) (④) に入る言葉の組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ③ほっと ④心配 イ ③ほっと ④納得

ウ ③がっかり ④心配 エ ③がっかり ④期待

オ ③びっくり ④期待 カ ③びっくり ④納得

問四 — 線⑤「いちおう知ってるけど」という会話文の中で、「いちおう」と言っているのはなぜですか。適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア クリスマスという風習はべつにたいしたものではないから。

イ クリスマスを知っているとはつきり言うとお父さんが三太が傷つくと思ったから。

ウ きちんと考えるとクリスマスとはどういうものか知らないのではないかと思ったから。

エ クリスマスを知らないというお父さんが困ってしまうから。

問五

—線⑥「らしい」の語の働きとして同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名刑事らしいみごとな推理だ。
 イ 台風が接近しているので、雨が降り出したらしい。
 ウ 彼女のしぐさはかわいらしい。
 エ 彼の言い方はいやらしい。

問六

—線⑦「どうだろうなあ。俺は答えに困ってしまった」というのは三太の話しているクリスマスが本当のクリスマスと微妙に違い、勇気はどこまで話すべきか悩んでいると思われる。それ以外にも考えられる説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大人たちはみんな勇気の答えに期待していると感じられたので、答えにくくなっている。
 イ 勇気が自分の知っているクリスマスを話すことで、三太がよけいクリスマスが分からなくなってしまうと考えている。
 ウ 靴下を履かない三太の行動がいけなかったと伝えていいのか、勇気は悩んでいる。
 エ 三太の父親である清一がクリスマスはどう考えているか分からないので、勇気は三太への答えが見つからなくなっている。

— 6 —

問七

—線⑧「鍵なんか、いつもかけとらん」と同じ登場人物の会話文を、文中の……線A～Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問八

次のア～オの文は、登場人物の説明である。その中でA「ヨキ」、B「みき」を説明しているものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア しっかりはしていないが、ものごとを頼めるくらい信用されている。
 イ 責任感が強く、いつも自分のことよりも自分の立場を考えて行動する。
 ウ 人の話にきちんと耳を向けて聞き、やさしい心づかいができる。
 エ 人の気持ちを考えずに行動し、後であわててとりつくりたりするが、根はいい人。
 オ 周りの人にあたたかく見守られていて、素直だが頑固なところもある。

— 7 —

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

現在六五歳以上の高齢者の多くは、大人になってから、しかも比較的最近まで椅子のある暮らしをしたことがありませんでした。もちろん学校や職場では椅子はありふれた用具であったとしても、もつとも気兼ねのないくつろぎの場である家庭には椅子はありませんでした。畳の部屋で構成される一般家庭では、椅子は違和感のある用具だったからです。

それにくらべ、欧米の家庭の暮らしは、床に直接腰を下ろすという生活習慣はなく、原則は椅子に座り、椅子の上でくつろぎ、そしてベッドに横たわり、睡眠をとるのです。

① どうして、このような起居様式(暮らしの中の身のこなし方)のちがいが生まれたのでしょうか。

高温多湿なアジアモンスーン気候の中では、竪穴式の住居は、四季を通してみるとけっして快適なものではありませんでした。穀物の保存にも苦労が多かったのです。湿気、虫やネズミたちとの戦いはどれほどのものだったのでしょうか。

そこで彼らが生み出したのは高床式の穀物倉庫でした。さらに、それから発展した高床式の住居は、結果として快適な床をもつことになりました。もちろん、その床に上がるためには、下足を脱ぎました。

奈良時代に大陸から伝わった椅子は、主に儀式の場で用いられ、当初は上に乗って座りました。つまり、座面の上で正座したり、あくらをかいていたわけです。しかも朝廷でも椅子の使用は制限され、親王と中納言以上ときわめて限られていました。平安時代になって、儀式の場で「腰をかける」ようになります。そして室町時代には貴族たちのあいだでは、椅子のみならず、ベッドも流行しますが、江戸時代には下火になります。もちろん多くの人々には、椅子そのものを利用する機会は近年までありませんでした。

② 1、夏場も湿気は少なく、冬は凍てつく大地の上に建てられた北ヨーロッパの住居の床は、外と基本的には変わりありません。彼らは腰を下ろすためだけに台をつくり、その台の高さにあうテーブルをつくりだしました。そのテーブルでの食事は、床に直接腰を下ろす習慣をもつ人々の食事場面とは大きく異なります。

また、睡眠のために横になる場合も床から少し高くなり、結果としてベッドが生まれました。そして彼らは、ベッドで横になるときまで、室内でも靴は脱ぎませんでした。

わが国でも、竪穴式住居から進化する過程では、同じように寝るための場所は床より少し高くなっていました。弥生末期から古墳前期にかけての竪穴式住居では、ベッド状のものも使われていました。② 奈良時代は「御床」(寝台)が使われます。ところが、平安時代に貴族の住宅である寝殿造の完成によって、板敷きの床が家屋全体に広がりました。高床式の住居の完成です。ここが起居様式における西欧との差異が生じる大きな分岐点だったのかもしれませんが。

そして、畳が発明されました。最初は必要などころだけに一枚ずつ敷かれていました。雛人形のお内裏さまとお雛さまが座っているのが当時の畳で、その使用法が想像できるでしょう。

畳はときには屋外にももち出され、敷かれていました。鎌倉時代から室町時代にかけて、それが床全体に敷きつめられるようになり、座つても、寝ても、歩いても、快適な床になっていきました。

床の上に直接腰を下ろす生活文化を「床座文化」と呼ぶならば、欧米の椅子やベッドを用いる生活文化は「椅子文化」と呼べるでしょう。

(中略)

われわれの食事パターンは、碗と箸を手にもち、脇をしめておこなうことになりました。すると、同じようにその動作をスプーンでおこなうと、横から食べることになります。欧米人はスプーンを斜め前方から口にアプローチさせます。だからあの形だし、スープを食べるためのものだから深さも必要というわけです。この発見には感心しました。また、それを元に、ごはんも食べやすい新しいスプーンを開発したことはすばらしいと思います。

③ あるとき、ある本で紹介されていたフランス人が日本の旅館で食事をしている写真が、とても気になりました。彼らが畳の部屋ではうまく床に座れないことを紹介するための写真で、たいへん奇妙なものでしたが、よく見ているとその姿勢はある原理に支配されていることがわかりました。彼らは、食事をするとき脇をしめないかわりに、テーブルに肘をつくということです。実際は肘の先のあたりをテーブルの縁に当てているという感じです。つまり、彼らがスプーンのみならずフォークやナイフで食事するときは、かならずテーブルが必要になるのです。

一方、われわれ日本人は長いあいだ、テーブルを使わないで食事していました。ちゃぶ台が使われるようになるのは、明治になってからです。それまでは、床に直接食器を置いて食べた時代が長いようです。そのときの床は畳ではなく、板張りです。その後、食器が載せられたお盆が床に置かれ、それで食べることになりました。

あるいは銘々膳と呼ばれた、四角のお盆に一〇センチほどの脚がついたものが使われていました。しかし、銘々膳は当初、身分の高い人だけが使う道具でした。昭和三〇年代までは家庭で冠婚葬祭をおこなう習慣が残っており、比較的余裕のある家ではかならずこの銘々膳にごちそうが並べられ、日常とは異なるハレの日を演出する重要な用具になっていました。

日本人の食事の動作を細かく分析してみるとわかりますが、高いテーブルに載せられた食器でも、手にもってしまえば何も問題はありませんか。ただし、椅子をテーブルから離しておく必要があります。また箸でテーブルに並べられた料理を取り分けようとすると、とても取りづらくなります。とくに鍋物をしようとテーブルにポータブルのガスコンロを置きさらに鍋を載せると、とても高くなってしまいます。調理役（いわゆる鍋奉行）はいつい立ち上がるようになってしまうのです。

これを床の上に腰を下ろしてやると、じつにしつくりきます。食器は各自お盆に並べると見た目も美しいのです。そして少し前まで多くの日本人は囲炉裏を囲み、鍋をつついていたのです。私たちは床座の文化をもつ民族なのです。

（光野有次『みんなで作るバリアフリー』）

※1 凍てつく……こおりつく。

- 2 分岐点……分かれ目。
- 3 アプローチ……近づくこと。
- 4 ちゃぶ台……和室で使う食器用の低いテーブル。
- 5 ハレ……待ち望んでいたためたい機会。
- 6 ポータブル……持ち運びができる。

7 鍋奉行……鍋料理の調理の仕方や食べる順序など、あれこれと世話を焼きたがる人。

8 囲炉裏……部屋の床を四角に切り抜き、火をたくようにしたところ。

問一 —線①「起居様式（暮らしの中の身のこなし方）のちがいを」として適切でないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 床に直接腰を下ろすかどうか イ 室内で靴を脱ぐかどうか
ウ 室内にベッドがあるかどうか エ テーブルで食事をするかどうか

問二 —線②「多くの人々には、椅子そのものを利用する機会は近年までありませんでした」とあるが現在六五歳以上の高齢者の多くが椅子を利用する機会がなかったのはなぜか。その理由を表す四十字以内の一文を探し、初めの五字を答えなさい。

問三

1	・	2
---	---	---

 に入る語として適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ そして ウ 一方 エ しかし オ 例えば カ だから

問四 北ヨーロッパの住居において、腰を下ろす場や寝る場が床より高くなったのはなぜか。日本の住居の床が高くなったのはなぜか。それぞれ説明しなさい。

問五 次の文が入るべき場所を探し、その直前の五字を答えなさい。

しかし、畳が一般化するのは江戸の中期以降で、農村においては明治を待たねばなりませんでした。

問六 — 線③「写真が、とても気になりました」について、その理由を説明した次の文の を、指定された字数で本文中の語を書きぬいて答えなさい。

1・三字 の食事のしかたと違って、 2・九字 という姿勢で 3・十一字 になる食事のしかたをしているから。

問七 — 線④「日本人の食事の動作」を具体的に示した言葉を、本文中から十八字で探し、初めと終わりの五字を答えなさい。

三

次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

北風 深尾須磨子

① にぎやかな北風だ

北風は神様以上に子供が好きで

いつも子供たちの良い守り役だ

町の中でも 原っぱでも

パイピヨロ パイピヨロと笛を吹き

いつも子供たちをあつめてゐる

紙芝居よりもおもしろい北風の笛に

② 子供たちは真赤になつて手を叩くたた

北風が笛を吹けば吹くほど

子供たちの数は増えてゆく

③ もしかすると子供たちは

北風の笛から生まれて来るのかも知れない

子供たちを火の子のやうにはしゃがせて

④ やがて北風は夕焼け空の方へ引きあげる—

夕焼け 小焼け

明日も天気だ 一天晴れだ*

四

次の□の中に入る数字を漢字で答えなさい。

- 1 □ 苦 □ 苦
2 □ 変 □ 化
3 □ 転 □ 倒
4 □ 期 □ 会
5 □ 寒 □ 温

五

線部の平仮名を漢字に直しなさい。

- 1 いがいにうまくできた
2 けわしい登山道
3 長い時間をかけてけんとうする
4 壁に掛けた時計が時をきざむ
5 社長のふくしんの部下

